

「国家の損です」

芝原 茂

今年はブラジル移民七十周年とか。このニュースを見聞きして、広島でお世話になった下宿のおじいさんを思い出した。下宿のおじいさんこと竹村銀次郎氏は、広島県に生まれ、少年時代に南米へ出かぜぎに渡航したブラジル帰りである。

彼が何十年かのきびしい労働の末かなり成功して財をなし、故国へ錦を飾ったのは戦前のことであつた。ブラジルで結婚したポルトガル系の奥さんと娘さんを伴つて、広島市に居を構えた。私が借りたのはその一室である。竹村氏の隣家二軒は、彼の兄と弟の住居であつた。彼の口からあからさまに聞いたわけではないが、あれこれ断片的な話を綴り合わせる

と、彼の財産でその兄弟の家庭も随分潤つたようである。

帰国してからの彼がどんな仕事をしていたのか聞いたはずだが記憶がない。ピカドンで奥さんを失ひ、私が知っている頃は、たつた一人の娘さんもう結婚して彼のもとを離れていて、彼は独りでひっそりと晴耕雨読とカトリック教会詣でに明け暮れていた。晴耕と言つても自給自足するだけで、作物を売るわけではなかつたし、雨読と言つても、十字架を掲げた小さな祭壇の前で本を読みながらブツブツつぶやく姿を見ることが多かつたから、聖書か公教要理を読んでいることが多かつたのであろう。まったく世捨て人の生活である。その当時は戦後間もない頃のこと、日用品も食料品も乏しかつた。そんな当時の目で見ても、彼の生活は非常に質素でむしろケチケチしたものという感じであつた。竹村家の炊事場を私も使っていたから、彼の作っているおかずが見ようと思わなくても見えてしまう。貧乏学生の私の方がはるかにぜいた

くだった。

そんな竹村氏のところへ新しい奥さんが来た。朝鮮総督府のお役人だった人の未亡人で、亡夫の遺した資産か何かが少ないながらも言つて下さい。少し位なお金なら貸してあげますよ」というおばあさんの好意に甘えて拝借したことも度々あつた。こちらは困りつぱなしなんだから。

彼女は竹村家へ来て間もなく、食べる物が粗末でかなわんと言ひ出して、自分のおかずをポケットマネーで調えるようになった。それでも彼は頑固に相変らず今までどおりの質素な物だけしか食べないらしい。おばあさんは、「おじいさんは変な人だ」と言いながら今までどおりの彼のおかずと自分の好みの物と両方作つていた。

この竹村氏のお得意のせりふは「国家の損です」だった。水道の蛇口からムダに水が滴るとか、食物を腐らせて捨てるというようなムダが彼の目にとまると、このせりふが出る。こっそり物を捨て

ところを見つかつてこのせりふを頂戴し恐縮したことが何度かあった。

おばあさんの方は、何かというと朝鮮ではこうだった、ああたつたと、かつて豊かに暮したことを数え上げて、今の生活を嘆いていた。

それぞれ外地での生活の長かつた二人だが、一方は、大日本帝国の栄光を背にして植民地に君臨していた人であり、他方は、まさに四面楚歌の中で苦しい労働に耐えてきた人である。いわば、戦前の日本人の生活環境の最右翼と最左翼にいた二人の取り合わせであつた。

竹村氏は、日本男児が負けてたまるかという感慨をもって異郷で敵やおのれと戦つてきたことであろう。その結果、「国家の損です」という言葉に集約される頑固なまでに強い人生観と愛国心が培われたのであろう。

敗戦間もない頃のこと、庶民はおのれ独り生きるのに精一杯で、敗けてしまつた国のために「国家の損です」などと国家百年の計を憂う余裕はなかつた。その

中で、「国家の損です」と粗食を貫くというのは、かなりの頑固ものだ。戦後のインフレのせいで、南米で稼ぎためた資産にかなりの痛手を負つたことでもあろうが、娘さんも立派に一家を構えているのだし、おじいさん一人が、時に少しばかり御馳走を食べても、その後の生活を支えられなくなるわけでもあるまい。しかも、奥さんがポケットマネーで調えた御馳走を「食べなさいよ」とすすめているのに、それさえ手を付けぬ。たしかにケチ／＼した生活だが、単なるケチではないのだ。

彼の「国家の損です」は、彼自身首尾一貫している生きざまゆえに重く感じられた。私にはいまだに忘れられぬ言葉である。かつては豊かであつた地球の資源の枯渇が懸念され、美しかった地球の汚濁が嘆かれているこの頃、竹村氏のこの言葉を、私は地球レヴェルに引き上げて、あらためて私の語録の中に収めている。時たま使つて「話がおおげさやね」とひやかされながら。

蛇足ながら、おばあさんは、二年ほど竹村家にいたが、結局、私にまで「お世話になりました」と挨拶して、竹村氏のもとを去つた。二人はそれぞれよい人だったので。

(しばはら しげ 文学部教授)



随筆

私の

サロン

吉江和子

私には時々自分で描きためた絵を引張り出して眺めるひそやかな楽しみがある。